

一宮の歴史特集

「一宮ゆかりの人々」

①加納久宜(二八四八〜一九一九)

今月から、「一宮の歴史特集」と題し、一宮町にゆかりのある人物や文化財を紹介していきます。第1回は町の礎を築いた加納久宜について紹介します。

加納久宜は嘉永元年(1848)に今の福岡県にあった三池藩の藩主の弟の子として生まれました。7歳の時、江戸(今の東京)の屋敷にいたところ、地震(安政の大地震)にあい、両親を亡くしてしまいました。そしてその後、上総一宮藩主・加納久恒の養子となり、19歳で一宮藩主となりました。その年、大政奉還が行われ、明治時代に入ったため最後の一宮藩主となったのです。

久宜はその後、新潟学校長などを歴任し、明治27年(1894)に鹿児島県知事になりました。6年7ヶ月の県知事時代に、久宜は農業や教育などに対して積極的な政策を進め、西南戦争で混乱していた鹿児島を近代化に導いたのです。

知事を辞めた後、入新井信用組合

(城南信用金庫の前身)の創設、荏原中学(現日体荏原高校)の設立などに尽力しました。

そして、明治45年(1912)、一宮町民の熱意により久宜は一宮町長に就任しました。久宜は青年会や婦人会を設立、また農業改革を行なったほか、別荘地・観光地としての開拓を進めました。かつて「東の大磯」といわれたのは、久宜のこの整備や誘致によるものです。大正6年(1917)に町長を退任しましたが、その後も名誉町長として毎日役場に出勤していました。

大正8年(1919)、久宜は療養先の大分県で亡くなりました。71歳でした。大正11年(1922)に遺骨の一部が分骨され、一宮城跡(現振武館周辺)の城山に墓が建立されました。



▲写真：一宮町教育委員会所蔵

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

一宮の歴史特集

「一宮町の文化財」

①一宮城址

本コラムでは「一宮町ゆかりの人々」と交互に「一宮町の文化財」を紹介していきます。今回は「一宮城址」(町指定史跡)を紹介します。

一宮城址は天然の地形を利用した標高約30mの台地上にあった山城(通称「城山」)でした。現在の振武館周辺で、玉前神社、観明寺のあたりまで城域だったと思われます。今でも「城之内」「陣屋」などといった城に関する地名が残っています。

築城の時期や城主はわからないことが多く、ほとんどが謎に包まれています。戦国時代の1560年代前後には安房里見氏の家臣である正木氏(勝浦や大多喜を支配した正木氏の一族)がいたことが知られています。

天正18年(1590年)の豊臣秀吉の小田原城攻めの際、一宮城主として「鶴見甲斐守」という人物がみえますが、この人物も里見氏の家臣であったらうということ以外、詳しいことはわかっていません。この合戦の後、関東には徳川家康が入り、一宮は家康家臣の本多忠勝(大

多喜10万石)の支配下に入り、城は廃城になったと考えられます。

現在、当時の面影を残すものはほとんど残っていません。昭和59年(1984年)の振武館建設時の発掘調査で出土したものが当時の様子を伝えるだけです(現在これらの出土遺物は「一宮城出土遺物」として町の指定文化財になっています)。

近年の研究成果から、一宮は水陸交通の要衝にあつたこと、湊があつた可能性が指摘されています。そのような点から一宮城は上総国において重要な拠点だったと考えられます。謎の多い一宮城ですが、戦乱の最前線として戦国時代を乗り越えてきたのです。



▲ 現在の一宮城址
(※大手門は史実に基いて作られたものではありません)

★詳しいことは「中世の一宮」(一宮町教育委員会、2004年)をご覧ください。

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成28年6月号



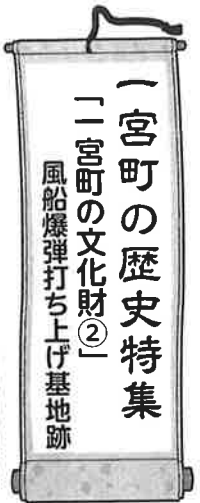
「二宮町ゆかりの人々」第2回は「加納久朗」を紹介します。

加納久朗は明治19年(1886年)、最後の一宮藩主で元一宮町長の加納久宜の次男として生まれまし
た。久宜の長男の久元は早世してい
たため、実質的な加納家嫡子でした。
久朗は東京帝国大学(現東京大学)
卒業後、明治45年(1912年)に
横浜正金銀行(現三菱東京UFJ銀
行の前身とされる)に入社し、満州
やニューヨーク支店勤務ののち、昭
和9年(1934年)にロンドン支
店の支店長に就任しました。その後
国際決済銀行の理事・副議長、横浜
正金銀行の取締役を歴任しました。
久朗の交友関係は広く、吉田茂



▲写真；一宮町教育委員会所蔵

平成28年7月号



「二宮町の文化財」第2回は「風船爆弾打ち上げ基地跡」を紹介します。

昭和19年(1944年)11月、一宮海岸から大きな気球がアメリカへ向けて放球されました。「風船爆弾」です。一宮を含め、福島県いわき市勿来、茨城県北茨城市大津の計3ヶ所から打ち上げられました。この計画は「ふ号作戦」と呼ばれ秘密裏に陸軍登戸研究所(現神奈川県川崎市)で開発が行なわれました。
「風船爆弾」は和紙とコンニャク糊で作った気球に水素を詰め、爆弾をぶら下げて、ジェット気流に乗せてアメリカ本土を攻撃する日本陸軍の秘密兵器でした。翌年春までに各基地から合計約9300発が放球され、アメリカ本土に到達したのは約280発と言われていますが、正確な数はわかりません。

終戦後、久朗は日本住宅公団総裁として戦後の住宅問題に積極的に取り組みました。昭和33年(1958年)には東京湾の埋め立て開発を提唱(「東京湾埋立による新東京建設提案」)しました。
昭和37年(1962年)、久朗は千葉県知事に就任しました。道路・住宅の整備などに尽力し、また、「移動県庁」など斬新な政策を次々と打ち出しました。
しかし、在職中の昭和38年(1963年)2月、志半ばで病に倒れ亡くなりました。享年76歳、知事在職期間はわずか111日でした。
久朗に関する資料はスクラップブックや日記として残されており、それらは平成11年(1999年)に加納家より町に寄贈され、「加納家史料」として保管されています。平成17年(2005年)には目録が『加納家史料目録』として刊行されました。
数多くの久朗の功績はこれらの資料からうかがい知ることが出来ます。父久宜と同様に久朗は日本の発展に大きく貢献した人物だったので。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416



▲所在地：市川学園一宮学舎に隣接

平成28年8月号

一宮町の歴史特集

「一宮町ゆかりの人々③」
上総廣常(？～1183)

「一宮町ゆかりの人々」第3回は「上総廣常」を紹介します。

上総廣常は謎の多い人物です。ただ安房(千葉県南部)で再起を図ろうとした源頼朝が最も頼りにした人物であり、そして頼朝の挙兵を成功に導いたのは廣常が味方したからだと言っても過言ではありません。

上総氏は房総平氏の棟梁であり、上総・下総に多くの所領を有し、東国でも最大の勢力を誇っていました。廣常はその上総氏の当主でしたが、廣常の前半生はわからないことが多く、その活躍が確認できるのは頼朝の挙兵の時です。

治承4年(1180年)、平家打倒のため伊豆(神奈川県)で挙兵した頼朝は石橋山の戦いで敗れ、安房に逃れてきます。再起を図った頼朝は廣常や千葉常胤を頼ります。当初、廣常はすぐには参陣しませんでした。隅田川辺りまで頼朝が進軍したところで2万騎の軍勢を率いて参陣します。数に誇張はあるでしょうが、東国有数の大軍勢でした。

頼朝に従った廣常は常陸国(茨城県)の佐竹氏討伐などで功績を挙げ、頼朝の御家人として活躍します。しかし、

無礼な振る舞いが多かったようで、だんだん頼朝から疎まれるようになったといえます。

そして寿永2年(1183年)、廣常は謀反の疑いをかけられ、鎌倉で殺されてしまいます。嫡男は自害、その他一族も処罰され、上総氏は所領を没収され没落します。

翌年、生前に廣常が玉前神社に奉納した鎧の中から頼朝の武運長久を祈願する願文が見つかり、廣常の謀反の疑いは晴れ上総一族は赦免されました。

廣常の居館は玉前荘にあつたといわれ、高藤山城(一宮町)や大柳館(睦沢町)がその候補として挙げられていますが、明確なことはわかっていません。高藤山城の山頂には江戸時代に一宮藩主・加納久徴が廣常の武功を称えて建立した「古蹟の碑」があります。



▲高藤山城址山頂の「古蹟の碑」

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成28年9月号

一宮町の歴史特集

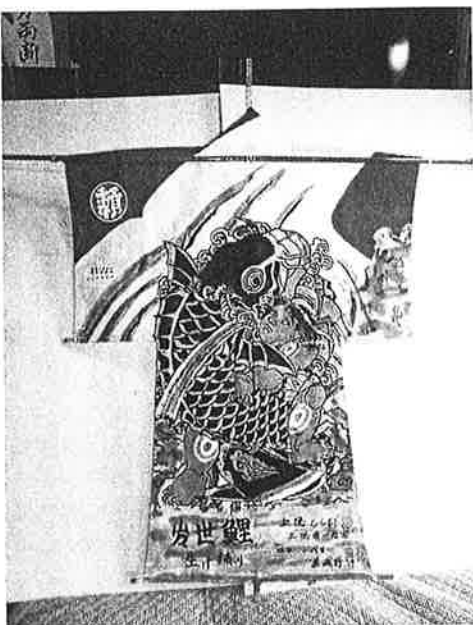
「一宮町の文化財③」
上総とんび

「一宮町の文化財」第3回は「上総とんび」を紹介します。

上総とんびは江戸時代、地曳網漁が盛んに行なわれていた頃に生み出された凧です。漁師が大漁の時に着る「万祝着」という着物と同じ形の凧で寛政3年(1791年)、一宮の字東村の重右衛門の創始と伝えられています。以後、代々嵯峨野家で一子相伝として伝承され、現在の嵯峨野彰氏で10代目です。

かつて九十九里地域では、凧揚げは5月の節句の行事として行われていたといえます。今では端午の節句、子ども誕生、上棟式、さらには社運隆盛を願う人々の運と願望を担っています。

上総とんびは、竹で骨組みを作るとき、縦骨が前に付き、それに和紙を張りまします。その外部に横骨が組み込まれています。かつては



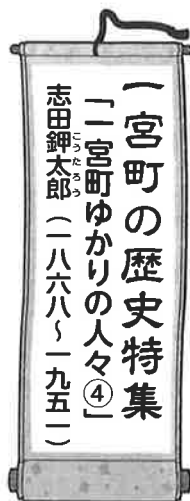
【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

フジラのひげを使って「うなり」と呼ばれるものを作り、独特な音を出しました。現在は代用うなりを用いて「うなり」を張っています。うなり棒は前に付け、後ろに張るのが代々伝承されています。

図柄は千支、武者絵、家紋の系統や日の出の鶴、寿などがありますが、「出世鯉生け捕り(写真の図柄)」という図柄が基本です。また女性が描かれた貴重な図柄も存在します。

現在も江戸時代の木版約40枚、図柄約80種類(木版両面刷り)、下絵約350点が技術とともに伝わっています。200年以上の技術と伝統、用具が今でも継承されているのです。

平成28年10月号



「二宮町の文化財」第4回は「志田鉦太郎」を紹介します。

志田鉦太郎は明治元年（1868）、東京で生まれました。明治27年（1894）、帝国大学（現東京大学）法科大学卒業後、大学院に進学、在学中に保険学会を創立するなど保険学・商法の分野で積極的に活動しました。

その後、学習院大学科教授、東京帝国大学法科大学教授などを歴任、大正9年（1920）には明治大学教授に就任するなど、法学者として活躍しました。明治末期には商法（商人の営業、商行為に関する法律）編纂のために清国（中国）に招かれました。

鉦太郎が一宮と関係を持つようになったのは、明治38年（1905）に一宮に別荘を建ててからです。翌年には本籍も移しています（昭和10年に東京小石川へ移転）。別荘があった場所は現在の創作の里の上の山で、現在石碑が建っています。創作の里を含めた一帯が、志田氏の別荘でした。昭和7年（1933）の「松井天山鳥瞰図」に

も描かれています。

大正14年（1925）には私立一宮実業学校（現一宮商業高等学校）の初代校長に就任、昭和11年（1936）までその職を務めていました。

昭和15年（1940）明治大学の第5代総長に就任、戦中の厳しい情勢の中、約3年間その任を全うしました。

昭和26年（1951）、82歳で死去しました。一宮の自宅に埋葬されましたが、昭和55年（1972）に自宅跡地が一宮町に寄贈されるに伴い、遺骨は町営墓地（宮の森霊園）に移されました。



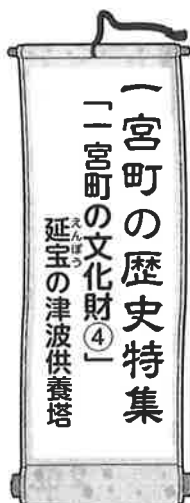
▲ 志田家別荘跡地に建つ石碑（創作の里・裏山）

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成28年11月号



「二宮町の文化財」第4回は「延宝の津波供養塔」を紹介します。

江戸時代、九十九里沿岸は度々津波に襲われました。町内にも多くの資料やその痕跡が残されています。その一つが今紹介する町指定文化財の「延宝の津波供養塔」です。

延宝5年（1677）、房総半島東方沖付近でM8とも推定される大地震が発生、東北から房総・伊豆、さらには尾張（現愛知県）まで、津波に襲われました。東浪見地区では6mもの津波が押し寄せたと推定されています。家屋は流され、田畑は砂浜と化し、船も地曳網も残さず流され、復旧に5年から15年を費やしたと伝えられています。

この供養塔は、津波から17年が経った元禄7年



▲ 延宝の津波供養塔（新熊集会所前）

（1694）に犠牲者の供養のために建てられたものです。表には観音菩薩像が彫られ、「十万万返 成就 施主 一四三人内 男七十人 女七三人」と刻まれています。東浪見地区に残された古文書には52軒の家が流され、男女子ども137人が亡くなったと記されています。数字に誤差はありますが、東浪見地区だけで150人近い犠牲者が出たことがわかります。

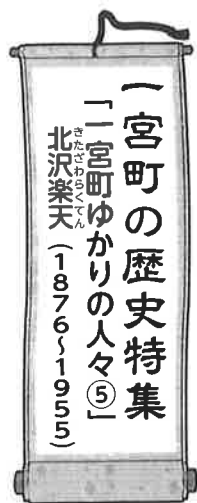
この供養塔は犠牲者への祈りだけでなく、後世への教訓のために建てられたでしょう。私たちはこの教訓を、また次の世代へ、伝えていかなければなりません。

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成28年12月号



北沢楽天は日本初の職業漫画家とい

われている人物です。

楽天は明治9年(1876)、東京で生まれました。本名は保次とい
ます。明治32年(1899)、福沢諭吉が主宰する時事新報社(新聞社)に
絵画記者として入社、政治や社会風刺画を発表するようになり、明治36年(1903)頃から「楽天」のペンネームを使い始めました。明治38年(1905)には日本初のカラー漫画雑誌「東京パック」を創刊、

大正10年(1921)には時事新報から日本最初の新聞日曜漫画版として「時事漫画」が独立し、楽天はそのカラー漫画版を担当するようになります。

昭和7年(1932)に時事新報社を退社、その後は東京の自宅アトリエで「楽天漫画スタジオ」を開設、昭和9

年(1934)に「三光漫画スタジオ」と改名し、後進を指導しました。戦後は埼玉に移住し、昭和30年(1955)に79歳で亡くなるまで日本画を描く日々を送りました。第2次世界大戦前に発行された「楽天全集」は手塚治虫

に影響を与えたといえます。楽天は一宮川沿いに別荘を所有しており、亡くなるまでたびたび一宮を訪れています。大正元年(1912)には自らが経営する楽天社から「二宮案内記」という観光案内を刊行しました。南宮神社に伝わる楽天の絵馬(町指定文化財)など、町内にもその作品は多く残されています。

楽天は一宮川沿いに別荘を所有しており、亡くなるまでたびたび一宮を訪れています。大正元年(1912)には自らが経営する楽天社から「二宮案内記」という観光案内を刊行しました。南宮神社に伝わる楽天の絵馬(町指定文化財)など、町内にもその作品は多く残されています。

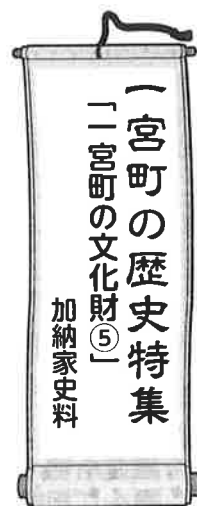


▲北沢楽天筆色紙「乃木大将」(一宮町教育委員会所蔵)

【問合せ】

教育課 ☎(42)1416

平成29年1月号



「加納家史料」とは、元・千葉県知

事の加納久朗(1886~1963)

関係の文書群です。戦前から戦後にかけての書簡や日記、スクラップブック、また久朗の父・久宜(ひさよし)に関する資料まで、総数は1686点にもなります。平成11年(1999)にこれらの資料は町に寄贈され、現在、教育委員会で保管しています。

この文書群には、久朗が横浜正金銀行(現三菱東京UFJ銀行の前身とされる)のロンドン支店長として、戦前・戦中に日本外交に関わり、活躍したことがわかる資料が豊富に収められています。吉田茂(1878~1967)、元内閣総理大臣)を始め、木戸幸一(1889~1979)、内大臣などを(経験)といった著名な財政界人とのやり取りの記録が残されており、戦中に親英派として、彼らと共に戦争回避に尽力した姿を伺い知ることができま

す。

また久朗が日本住宅公団総裁時代の日記などの書類や晩年の千葉県知事時代(在任わずか111日)の資料も残されています。

このように「加納家史料」は戦中・戦後の日本の外交・政策だけでなく日本近現代史を語るうえでも貴重な資料なのです。



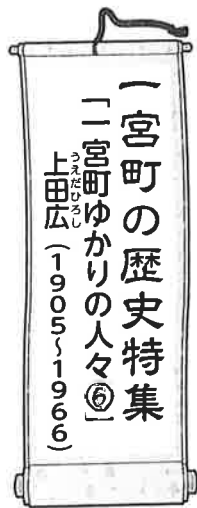
▲「加納家史料」(一部)

※「加納家史料」の目録は「加納家史料目録」として2005年に教育委員会より刊行されています。

【問合せ】

教育課 ☎(42)1416

平成29年2月号



上田広は明治38年(1905)、長生郡豊栄村(現・長南町)に生まれ、本名は浜田昇といひます。鉄道省を卒業後、国鉄に勤務、大正14年(1925)ごろに坪田譲治(1890~1982、児童文学作家)らを中心とする創作朗読会に入会、以後プロレタリア文学などの影響も受けて、作家として活動していきます。昭和9年(1934)に筆名「上田広」を名乗りました。

昭和12年(1937)、日中戦争が勃発すると召集令状を受けて出征、中国戦線を転戦します。その陣中でも小説を執筆し続け、翌13年に「大陸」に掲載された「黄塵」などで一躍文名を高め、火野葦平(1907~60、小説家)、日比野士朗(1903~75、作家)らとともに「兵隊作家」と呼ばれました。特に『黄塵』は第8回(昭和13年)芥川賞の予選候補作にもミネートされるほどでした。

その後昭和14年(1939)に帰還し、国鉄に復帰しますがその2年後には退職。太平洋戦争が開戦すると、今度は軍報道班員として、昭和18年

(1943)にはバターン半島(フィリピン)の攻略戦に従軍、戦話集『緑の城』(昭和19年)を書きました。

一宮町の細田に住んでいたこともあって、昭和38年(1963)、合併10周年を記念した一宮町史編纂委員会の編集委員長となり、翌年3月に『一宮町史』を刊行しました。また同年、『日本国鉄百年誌』の編纂にも携わりました。

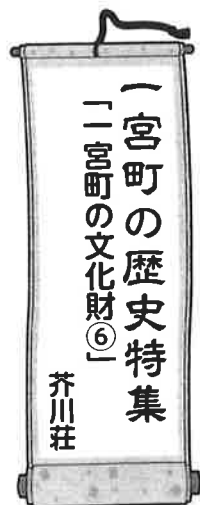
昭和41年(1966)に死去。昭和56年(1981)には文学碑「黄塵碑」が建てられました。また、居宅跡には平成26年(2014)に案内看板が設置されています。



▲文学碑「黄塵碑」(一宮海岸広場)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成29年3月号



芥川荘は一宮川の河口近く、一宮橋の畔(ほとり)にあり、旅館「一宮館」の離れとして使われていました。明治30年(1897)ごろの建築とみられています。

その名の由来は、芥川龍之介(1892~1927、小説家)が滞在したこと因みます。大正3年(1914)夏と大正5年(1916)夏の2回、芥川は一宮を訪れており、その2回目の訪問の時に滞在したのが一宮館でした。

大正5年8月17日、親友の久米正雄(1891~1952、小説家)と一宮海岸へ出かけた芥川は、友人の紹介で一宮館を訪れ、その離れに9月2日まで滞在しました。その場所が「芥川荘」と呼ばれている建物ということになります。

そこで芥川は恋人である塚本文(1900~68)に長い求婚の手紙を出しています。この年の12月に文と婚約、その2年後には結婚しました。

この他にも芥川は夏目漱石(1867~1916)らに一宮での

生活を書き送っています。またこの一宮での思い出は『微笑』(大正14年)、『海のとおり』(同上)、『盛気楼』(昭和2年)などの芥川の作品に綴られています。

平成13年(2001)、芥川荘はこの地方の伝統的な民家建築(茅葺屋根の寄棟造り)として認められ、国の登録有形文化財となりました。

在りし日の、「東の大磯」と呼ばれていたころの一宮の風景を、そこでは感じるができます。



▲芥川荘。かつての一宮の風景が蘇ります。

※「芥川荘」を見学希望の方は、一宮館(☎(42)2127)までご連絡ください。

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416